

## かごしま農36景



### カッパ天国

科学・文明が発達し、地球の裏側のニュースが瞬時にして伝わる現代だが、私たちは神仏に親しみ、あるいは霊のたたりを怖がる。悪魔や妖怪、変化とも付合う。妖怪の一種にカッパがいる。人間に最も近い存在だろう。東北には、ある家の妻女がカッパの赤ん坊を生んだという昔話があるくらいだ。

カッパは水界に住む動物。その特徴は頭の皿。これの水がなくなると、途端にカッパの力は抜けてしまう。皿に水を貯えるところから水神、あるいはその使いといわれている。滝壺や溪流の淀む深淵に立つと、足がすくみ、カッパがスーと手を伸ばしてくるのではないかと思う。カッパに引込まれた人や馬の話は各地に伝わる。カッパは引きずり込んだ人の尻から手を入れて好物の尻子玉(肝?)を取るといふ。これは、水死すると肛門の括約筋が緩んで開いてしまうことから来ている。カッパにとっては迷惑な話だ。

川や池の水は、家庭からの污水排出のほか、農薬や化学肥料の多用により悪化。加えて至るところコンクリートの水路造り。このため、トンボやホタルが棲めなくなったという。

それどころか、子供たちも川や池に入らなくなった。これは水の汚染のためだろう。だが、それだけではない。危険ということで遊ばなくなった、というよりも遊びを禁じられたといったほうが適切であろう。今年の夏「ここは、カッパ天国、ほくたちだけのあそびばなんだよ」というポスターが出た。「用水路やため池で遊ぶのはやめましょう」ということだ。五匹の子供カッパが目を見据えて、こちらを見ている。いや睨んでいる。尻子玉を取るぞといった構えだ。

昔、天狗岩に立って碧の淵を臨み、思わず尻込みすると「やっせん坊」といわれ、尻を押されて飛び込んだ。そして泳ぎを覚え、遊びのルールを知った。今やプールや公園が整備された。子供たちは川や池で遊ぶ必要はない。だが、それでも忍びこんで遊ぶ子供が出てくるから『カッパ王国』のポスターは作られたのだろう。カッパは河童と書く、川の子供だ。川や池が『子供天国』であって然るべきということだろう。カッパならぬ子供たちにポスターを作らせたら「カッパ君といっしょに遊ぼう」と。そして「僕たちが遊ぶから川や池を大切に」と続くことになろう。

カッパは子供の化身、だからこそ、私たちの身近にいるのだと思う。カッパの住める、遊べる川や池をと、願う。

(1994年8月)

◇「かごしま農36景 / 発行: 鹿児島県農業農村整備情報センター」より

文: 門松経久

写真: 大徳貴子「むじゃき」第3回かごしまフォト農美展